

日原正彦さんが今年の三月に奥さんを亡くされた。何年ものあいだ闘病生活をされていた。今は、娘さんが近くに住んでいるとはいえ、東京のマンションで一人暮らしだ。もともとは岐阜県出身で、仕事の関係で名古屋暮らしを定年までつづけていたから東京での生活は「地元」ではない。地元の軋轢、がないかわりに、かれにしかわからない孤独感もあるようだ。日原さんはほくより一歳年上だから（いわゆる団塊の世代と呼ばれているが、ほくは団塊の世代とひとくくりにされるのが嫌いだ）不案内な東京とはいえ、同年代で親しくしている詩友もまだまだ十分に元気で、会おうとおもえば会える環境であるから、「あの人もこの人も亡くなった」という真正な孤独をかかえるにはまだ間がある。しかし、あと十年もすれば亡くならないまでも、交流できなくなる詩友もおおくなるだろう。日原さんがちやがまっているかもしれない。ほくらの世代は、そういうところへ足を踏み入れてしまったようだ。

日原さんの奥さんが高知市出身ということで、日原さんが高知に来たこともある。いやそれ以上に日原さんとは妙に因縁があつて、ともに二十代のころから、片岡文雄さん主宰の『開花期』や西一知さん主宰の『舟』に所属していた。若いころから日原さんは情緒性を前面に押し出した叙情的な詩を書いていて、ほくの作風とは正反対だったが、もう四十年ぐらいの付き合いである。ときどき電話で、たわいもない話をしながらあと十年ぐらいは「しつかり原稿書きながら」生きていきたいねえ、と話しているが、どうなることやら。

しかった

迎えの舟が 疎林の外れの川に舫っているのだ

私はその舟を見かけることはなかったが
舟を待つ白装束のものを遠く見ることがあつた
秋が長ける 明け方の月が消えないうちに

「ありあけ荘」を探さなければ

友よ あの小暗い廊下を通つていくあなたに

間に合わなければ

大切なことを伝えなければ

大切なことも伝えなければ

大切なことがとても大切な 私はそういうものなので

色褪せた月と一緒に 不意に浮かんでくる

「ありあけ荘」を探さなければ

もう決して逢うことのできない

友よ あなたに逢わなければ

ほくがこういう心境になるにはもうすこし時間がある。当然、ありあけ荘とは小柳さんの自我を形成した場であり、肉体的にも精神的にも交渉をもつたおおくの他者のことである。それらが「ありあけ荘」として代理されているわけだが、無くなったおおくの事柄が小柳さんの無意識を形成していて、小柳さんは小柳さん自身の根柢、それは自分の生と引き換えにしてもいいとおもっている「わたしとしての根柢」を内省的に求めようと

小柳玲子さんはほくよりひと回り上である。小柳さんの周りではあのひともこのひとも亡くなってしまった。ホスピスで亡くなったわたしの大切な友だち、竹馬の友のドイツ文学者、懐かしい名前なのに思い出せないオオノさん、ただの遠い（部屋）であるヘイ叔父、小柳さんの記憶の底を拭い去っていくかのようになまざまなひとが亡くなっていく。そんな死者との交流が血肉を通わせている新しい詩集『簡易アパート』（花神社）から同タイトル「簡易アパート」全編。

「ありあけ荘」を探している

町外れに建つていた簡易アパートで

桃色に塗りたくつた板壁が すでに色褪せていた

ありあけて ああいう色なのだろうか

と 思いながら 路地を曲がり

もう一度曲がり 遠い学校へ通つた

アパートは東から西へ長い土間廊下を通つていたが
突き当たりに壁はなく 疎林の方へ抜けていた
アパートの住人に出会つた記憶はほとんどないが
夜明け方 見知らないものたちがそそそと通り抜けてい
く

気配があつた

彼らはどこか違う世界に急ぐものらしかったが
あれこれと長い別れの挨拶など交わしていたため

時間が足りなくなり この近道を遠慮がちに走つていくら

しているのだろう、とおもいながら読ませていただいた。

小柳さんは最後の最後、こうおもい至る。大切なことを伝えなければいけないし、その一方で大切でないことも伝えなければいけない。なぜなら、いま、この場に立つてみて、大切でないとおもつていたことが、その実、とても大切な事柄だったのかもしれない、とこの場に立つて、はじめて、そうおもえてくるのだから。

いや、そうではないのかもしれない。大切でないこともこの世間には常に必要で、大切なことだけで生きていくのは息が詰まることで、だから、大切でないこともきつちり生きることです「生存」のバランスをとっているのかもしれない。

西岡寿美子さんから詩集『すゞれる』（二人発行所）をいただいた。すゞれるとは徐々に崩れ落ちるという意味の土佐言葉のことだが、ほくらの世代では使っていないし、解説なしには伝わらない。あとがきで、すゞれるのは単に山だけではなく、そこに住む人そのものも、次第に都市へ都市へとすゞれていくようになり集落の住人は激減し、都市労働に適さない高齢世代ばかりが取り残され、この国の山間で、何代にもわたり営々と拓き、それでいて生計を維持してきた人里が、地図の上から消滅している、と書いている。高知だけでなく、日本全国、過疎地の現状はそういうことだろうとおもう。

モアイ像で有名なイースター島の文明が滅びたのは、島の森林を伐採したためだといわれている。森林がなくなることで、

土地に保水力がなくなり、作物ができず、木の皮を剥いで縄などの日常用具も作れず、木を薪にして暖をとることも、調理することもできずイースター島の文明は滅びたそうだ。(ジャレド・ダイアモンド『文明崩壊』(章思社))

高知でも森林従事者が高齢化し、間伐さえできずにいるときいたことがある。一方で鹿が増えて木の若芽を食べて樹木が生育しない地域もある。

この世間ではマウスのクリックひとつで何億円、何十億円儲けたと得意になっているひとがいるし、あるいはインターネットでバーチャル商店街というのを立ち上げて、プロ野球球団を買ったひともある。いずれも顔の見えない、幽霊みたいな存在である。その幽霊が現代の寵児と祭りあげられている。ほくらの古い世代が物の流通を経済だとおもっていた時代はとつくに終わってしまったようだ。

まあ、ひとはそれぞれだからどれが悪い、これがいけない、と試してみてもはじまらない。お金を儲けることだけに執着するひとがいても、貧乏なほくがやつかみを入れることではないし、いやいや、やつかみも持っていない。その日がしのげるだけの金銭と、ときたまのささやかな欲望を満足させるだけの金銭があれば、まあ、それで十分だし、いままでそうして生きてきた。

作品「二〇〇三リポート I」から、後半部分を引用する。

何が堪らんいうて

やんがてここが無人になり

——眉目衆にすぐれた若嫁姿の人であったが

ひとが死ぬということは集落がなくなることである。都会ではひとの死は個体の死だが、地方では集落の死に結びつく。自然の営みに沿って営々と築いてきた生活が、個と共同体の記憶が、閉ざされる。眉目衆にすぐれた若嫁姿のひとが、自然界の劫(古代インドにおける最長の時間)を経て山林の精気から生じるといわれている物の怪「魍魎」になって、口を養っていた田畑とともに、ひとびとから、世間から、時代から消滅していく。しかし、とおもう。ひとが滅ぶと同時に土地も滅ぶ。あとに残るのは、猪、熊、かもしか、狸、いたち、山兎たち。空にはタカやトンビやワシが舞っている。すべてが自然にかえつてしまう。が、まあ、それはそれでいいではないか、とおもう。ひとが生活していたことも、それらの糧を生産する田や畑があったことなど跡形もなくなつて、そこは山の生き物たちの生息地となる。そうなることでようやく「不法に領域を侵した人間の罪」などチャラにしてみらえそうだ。

そんなふうにして、ひとと土地も「生存の記憶」を時空に流して、消えていく。いまは、過疎地の集落だけが、そのうち、過密地の都会でも、ひとと土地の記憶が消えていく時代がくる。地球はたんなる惑星にかえつていく。文明ははしやぎすぎたぶん急速にしぼんでしまうだろう。

とはいってもいまはまだ、ヒトの文明がこの惑星を支配して

連れ合いもあたしも旅装束着て

先に往んだ爺やん婆やんのねきに並ぶ時に
あたしらも枕上で

ヒューイ ピョーイ ングゲ

胸を裂いてあれが啼くかと思うのが堪らん

その頃にや今あたしらが

大事に穫り上げて口を養うておる田も畑も

鹿をはじめとし

猪 熊 かもしか 狸 いたち 山兎ら

おのが天下と鼻息を吹いて

人の住んだ柔地をええことに

強い蹄や四つ足でのえくり回るのがじゃろう

空には大鳥のタカ トンビ ワシも舞うておろうよ

——この人は一身に引き受けようとしている
不法に領域を侵した人間の罪のようなものを
いや違う

つぶつぶと語るのが今は人間の言葉と聞きなせても

総白髪の

九十度地を這うその身も

女とも男とも分からぬ割れひしげた声も

曲がった指の指し示すところも

いながらにして

樹草 鳥獣虫魚の劫を経た

魍魎というものに変わりつつあるのかも知れん

いる。このヒトは、言葉を獲得することでほかの生物とは違う
高度な文明を築いてきた。

言葉と文字で成立しているこの世界、ソシユールのいう「世界は言葉によって分節され認知される」世界。物質が先にあって、それに名前をつけていく世界ではなくて、言葉を獲得することで世界を認識する枠組みが決まり、世界を理解できるようなる、という世界をほくらは生きているのだが、北川朱実さんの『ラムネの瓶、錆びた炭酸ガスのぼくはつ』(思潮社)はそのことをおもいださせてくれる一冊だった。集中から「字が書けそうだった」全編。

道を歩いていると

とつぜん家と家との間にさら地があらわれ

そこに何があったか

言葉は降ったのか

何一つ思い出せなかった

文字をおぼえて

過ぎたことを忘れることができなくなった

書かなければ

あったことの多くを忘れられるという

遠く ギニアの奥地で

一つの文字も持たずに
五千年を生きた部族

彼らの前を通り過ぎた人々の頭蓋は
洗われ
磨かれ

休館日の図書館みたいな木のうろに
ひっそりとしまわれているというが

頭蓋の鮮やかな傷も
彼らにとつて

河の蛇行ほどのものかもしれない

今日

誰も書かなかった明け方の汽車に乗り
誰も書かなかった土地を旅した

ひらべつたい文字を
川に向かって投げると

何かをこらえたように
いくつも水を切つて見えなくなり

空を 白い貨物船が

律儀にゆっくりと航行していった

字が書けそうだった

ここでは文字について書かれている。文字をおぼえることで世界を記憶することができ、文字をしらなければ世界は忘れられていく。ぼくらは何千年も昔の文明を、発掘された遺跡の文字でしることができ。

しかし一方で、アマゾンの奥地に分け入つて未開部族と接触を図ってきた人類学者レヴィ・ストロースは、かれら文字を持たない民族にも独自の文化がある、とサルトルの西洋文明優秀主義を批判したのだが、それは文字を持つ西洋文明だけが文明じゃないよといっていることで、文字を持つことのなかった未開人にも「野生の思考」というべき科学的な論理があり、従来考えられていたように、西洋文明は野蛮な文明を洗練させて作り出されたものではないよ、といっているのだが、それは北川さんふうにいえば、ギニアの奥地で生きている部族の、洗われ磨かれた頭蓋に刻まれた大河の蛇行のような鮮やかな傷、ひとびとの語り伝えられた記憶が、部族の記憶として「休館日の図書館みたいな木のうろに ひっそりしまわれている」文明の在り方に心をはせることなのだ。ぼくたちは文字を持っているのに、その文字を丁寧に、繊細に、ひととひとの交通の場として使っているのか、重層的な思索と理念に使っているのか、そして文字は、言葉は、ぼくたちが世界を認識することの役にたっているのだろうか。

れることはわれわれの文明の豊かさも失われることである、といったような紋切り型の、優等生のコメントで番組は終わったのだが、あれはもう10年ぐらい前の話だったから、いまだでもうその部族は減んでいるだろう。いや、ぼくらが知ることもないイゾラドのいくつかの部族ももう減んでいるだろう。

9月15日(日)、高知市内の公園や商店街を会場に『高知街 ラ・ラ音楽祭2013』という路上ライブの一日がおこなわれた。台風の接近で大雨のなか、130組あまりのアマチュアバンドが演奏を繰り広げて、高知市内は一日、音楽の街になった。

弘井さんの勤務する病院のメンバーもアイルランド音楽で参加した。参加は6年目。まあ、弘井さんはアイルリッシュが好きで、いつも楽しそうにバイオリンを弾いている。いままで尺八や琴などいろいろチャレンジしていたが、最近バイオリンにおちついたようだ。結局、自分が楽しいとおもえることが長つづきするし、上達もするのだろう。

食事をしたあと、弘井さんと長話をしたのだが、弘井さんは和辻哲郎の『鎖国』を読んでいて、戦国時代、鎖国の網をかくくぐって日本でキリスト教が普及されていく時代のダイナミックさがおもしろいといっていた。いま、NHKで『八重の桜』というドラマをやっていて、主人公の八重さんがキリスト教者になるのだが、「八重さんは、汝の敵を愛せよ、というのをどう理解しただろう」と弘井さん。まあ、ドラマだから、とぼくはおもったのだが、弘井さんは「汝の敵を愛せよ」がかれのど

北川さんは「道を歩いていると とつぜん家と家の間にさら地があらわれ」、そこに何があったのか、そのことの記憶がなくなっているのだが、そのことは先に挙げた疑問を北川さんがもっているせいなのだが、ではどうすれば、文字を文字として取り戻せることができるのか。北川さんは文字を持たずに生きた部族のひらべつたい文字（北川さんが名づけた、まだ誰にも認知されていない、まだ世界のとつかりにもなっていない文字）を川に向かって投げてみる、すると「何かをこらえたように」いくつも水を切つて見えなくなる。そのとき、川面に残された文字の軌跡を追いながら北川さんは北川さんの生きているこの世界を文字で名づけられそうな、そんな希望がわいてくるのだ。この一編にはそのように、文字を獲得することで北川さんの世界が、空を白い貨物船が航行していくような鮮やかさとともに獲得できるだろうことが書かれている。ほかに「ロバの来る日」「空の匂い」「住宅展示場の鳥」「明日の村」など、北川さんの言葉にたいする考察が楽しかった。

アマゾンの奥地に現代文明と接触したことのない先住民が住んでいて、その何百部族の総称をイゾラドというそうだが、もう何年前か、NHKのTVで、そのイゾラドの一部族のドキュメントをやっていた。そのイゾラドのなかにふたりの男しかない部族があつて、ブラジルの政府機関が保護を試みる、といった内容だったが、ふたりの男しかないということは、その男たちが死んでしまえば、その部族の文化や言葉が完全に失われるということである。NHKだから、異質な文化や言葉が失われ

ここに引っかかっているらしい。

キリスト教文明が減びることはあるだろうか。かつて、いまも、宗教戦争は世界中で起こっている。キリスト教文明は、キリスト者の内部から減びるだろうか、それともほかの宗教によつて減ぼされるのだろうか、いやいや、宗教とは関係のない地球の変動によつて減んでしまわないともかぎらない。この夏、地球はすこし不機嫌だったみたいだが、それが文明崩壊に結びつくかどうかはわからない。

今年の夏は数十年に一度とかの気象で、豪雨と竜巻におおきな被害を受けた。この気象が、何十年に一度の異常なのか、これから地球の気象が変化してこの気象が常態になるのか、来年、再来年を見てみないとわからない。今年の荒れた天候を見ながら、ふと、中世ヨーロッパのことをおもいだした。

たとえば、リア王やマクベスの時代、父親殺しや王殺し、背信や復讐、権謀術数が嵐を呼んでひとびとの心を翻弄していく物語の背景に吹き荒れている嵐や雷をおもいおこした。まあ、森が移動する（マクベス）ことはないだろうが、竜巻で森が破壊されることは十分ありうるとおもったりしたひと夏だった。あるいはコナン・ドイルの『失われた世界』に出てくる恐竜と嵐の舞台設定がこのひと夏に再現されたのでは、などといったい妄想が膨らむひと夏だった。恐竜とは、いまだに漏れつづけている放射能と、電力会社の目先の嘘、経済ばかりを声高にうなりつづけている政府、と言いかえることもできる。そして、やむことのない嵐はほくらがこの先覚悟しなければならぬ「世間」なのかもしれない。そして、もしかしたら、ほんと

うに、森は動いて、赤ちゃんは母親の股から生まれなくなるかもしれない。

新詩集のお知らせ。

谷元益男さんが『骨の気配』（本多企画）を、坂多瑩子さんが『ジャム煮えよ』（海の人）を、日原正彦さんが『冬青空』（ふたば工房）を出しました。

前号の訂正をひとつ。

福原恒雄さんの『壊れても』23ページ1行目、

「さわさわと年甲斐のこえが遠くPで呼びました」は、

「さわさわと年甲斐のこえが遠くで呼びました」に訂正します。

112号の合評会は11月10日(日)、いつもお借りしている聖パウロ教会で、2時から5時までやります。

113号の締め切りは11月末です。